

柳田国男と「山村調査」

— 民俗学確立期の研究体制とその運動論 —

Yanagita Kunio and the Research of Mountain Village

はじめに

柳田国男が主導したいわゆる「山村調査」は、民俗学の学史でいえば戦前の一つのエポックだという評価は、はたしてどこまで妥当なのだろうか。本稿で扱うのは、柳田の思想そのものではなく、「山村調査」の運動論としての側面からの再検討だ。

柳田国男の民俗学は一九三〇年代半ばに理論的体系化と研究体制いずれもが確立し、完成したと福田アジオは指摘する。後者の研究体制でいえば、「山村調査」の実施と、今一つ「日本民俗学講習会」を経ての「民間伝承の会」組織化である。そこで多大な貢献を果たしたのが、橋浦泰雄や大間知篤三等マルクス主義から転向してきた人々だった。組織を作り運営する訓練を経験し、そして実践してきたノウハウが活かされることになったからである〔福田 一九九〇 一四三〕。また田中宣一も「山村調査」について、各地の民俗を深い洞察力をもって比較研究し得る中央の研究者養成をもちろんでいたと、研究体制の確立という点から位置付けている〔田中 一九八五 四〇〕。研究体制の確立という面

矢野 敬一
(YANO Keichi)

(平成二十二年十月六日受理)

からの評価では、岩崎真幸も同様だ。他郷人による調査の制約という問題に対して、一定レベルの研究者集団による共通の調査項目に従った共同調査を実施することによって解決し、後の民俗調査への道を開いたのが「山村調査」だと岩崎は評価する〔岩崎 一九八六 七五〕。

だがここで振り返らなければならないのは、研究体制の確立という問題をどのように考えていくか、ということだ。「山村調査」と同様な項目立てでなされた調査は、その後のいわゆる「海村調査」でなされただけで、戦後になるとこうした試みは立ち消えてゆく。また「山村調査」の参加者の多くが、様々な理由で民俗学の世界から離れていったことも否定できない。「山村調査」への積極的な評価の一方で、こうした事実をどう押さえていくべきなのか。

民間学としての民俗学の展開ということを見る上では、どのようにその裾野を広げていったのかという運動論的な側面からの理解は欠かせない。たとえば「民間伝承の会」の機関誌『民間伝承』は、いかにして読者を誌面に参加させてきたのか。この点について筆者は「読者への呼びかけと応答の回路」が誌面上で作動していたとし、その具体的展開につ

いてすでに論じた「矢野 二〇一〇」。本稿はそれを受けて、「山村調査」が実施されていく過程がどのように読者へ呼びかけられていたのかという問題や、調査に参加した木曜会同人たちの動向について運動論的な観点を交えて論じる。ここでは同人相互の方法論的な齟齬、メディア戦略の如何が取り上げられるだろう。

本稿では最初に雑誌『民間伝承』誌上の「山村調査」関連の記事を取り上げ、中央と地方という関係に根差した研究体制を作り上げていく力学の所在について論じる。また地方でどのように木曜会同人や柳田を受け入れていたのかについても、触れる。次いで「山村調査」の成果を調査者たちが報じたいくつもの活字メディアに着目する。たとえば『東京朝日新聞』といった新聞、あるいは『現代農業』『山林』といった民俗学以外のより広範な読者層をもつ雑誌も掲載媒体となっていたことは、今では見失われている。だがそこに寄せられた文章は、「山村調査」の最終報告書『山村生活の研究』とはおよそ異質な目的意識に根差したのも見受けられる。そこで同人たちはどのような内容の文章を寄せ、そこから何が読み取れるのかを論じたい。そしてこうした活字メディアを通じた「山村調査」のメディア戦略は、どのようなものだったのかについて言及しよう。⁽¹⁾

一 雑誌『民間伝承』の中の「山村調査」

柳田国男が民俗学の方法論について述べた『郷土生活の研究法』を上梓した昭和六（一九三一）年は、柳田自らが採集者を養成する必要を痛感していた時期であった。その構想が、やがて柳田を囲んでの談話会「木曜会」の発足と「山村調査」の実施によって実現していく「鶴見

一九九八 二九」。

柳田国男研究会による『柳田国男伝』からその間の経緯を紹介しつつ、「山村調査」の具体的な内容、実施方法についてまず触れておきたい。木曜会の発足の契機はどのようなものだったのか。発端となったのが『現代史学大系』全一五巻の一冊、『民間伝承論』の柳田への執筆依頼である。それに向けて柳田が周囲の学徒を集め、講義形式をとりながらまとめるために発足したのが民間伝承論の会だ。その第一回講義は昭和八（一九三三）年九月のことで、同年一二月まで続く。その終了後、参加者たちは民間伝承研究のための新たな会を作ること提唱し、柳田も同意する。民間伝承論の会が木曜日開催であったことにちなみ、会は木曜会と名付けられた。昭和九（一九三四）年一月に第一回例会があり、以後毎月一回から二回のペースで柳田の書齋を会場として開かれていく。「荒井 一九八八 七九三〜七九六」。

その当初の活動の中心となったのが、同年から開始となった「山村調査」だ。日本学術振興会に助成金の申請を行うにあたって、調査の名称は「日本僻陬諸村に於ける郷党生活の資料蒐集」（以後、「山村調査」と略称）とした。その後、申請は通り年間三千元が三年間、支給されるに至った。調査地は原則として各府県一ヶ所以上とし、交通に恵まれず世間との往来が制限されている村落を選定した。調査者はそこに全国共通の百の調査項目を印刷した『郷土生活研究採集手帖』を持参し、一ヶ所あたり平均二十日に及ぶ滞在で調査を行った。全国を網羅した大規模な調査という点で、「山村調査」は画期的な試みとして位置付けられるものである（荒井 一九八八 七九六〜七九八）。

福田アジオが指摘するように当時の民俗学の研究体制としての確立は、「山村調査」の実施と「民間伝承の会」の組織化によって果たされた

される。ではこの両者はどのように関連しあっていたのか、という点が問われなければならない。その内実に今一步、踏み込む必要がある。

この点でまず指摘したいのが、民俗語彙を基軸に据えた調査手法を重視する姿勢だ。『民間伝承』誌上では読者に「採集要項」欄や「共通課題」欄を通じて、民俗語彙単位で調査、報告を要請していた。それは読者に、より積極的な参加を促すための呼びかけと応答の回路として作動することになる。個々の民俗語彙を報告のユニットとすることによって、読者は自在にその長さやまとまりを調節して誌面に参加することが可能となる。形式による束縛にとられない気軽さが、投稿にあたってのメリットだ。

「山村調査」でも民俗語彙を報告のユニットとすることで共通する。「山村調査」で調査員が携えた『郷土生活研究採集手帖』（以下、『採集手帖』と略記）の形式からは、その間の事情が端的に読み取れる。この『採集手帖』は菊半裁判、布装で昭和九（一九三四）年から始まる調査期間の三年間、毎年度、手を入れ直して刊行された。昭和九年度でいえば調査項目は「一 村の起り」「二 村の功労者」「三 大事件」から始まり、「一〇〇 仕合せのよい家柄」で締めくくられる。「採集上の注意」を見ると、「なるべく話者の言葉のまゝ（方言等）を保存して下さい。特にかわつた意味を持つ言葉は必ずそのまゝ書き、それに説明を加へて下さい」という点が挙げられているように、民俗語彙を調査の単位として重視する姿勢が伝わってこよう。

初年度の『採集手帖』の形式から調査後、ページごとにばらばらにして調査項目数の百に対応した百枚の資料カードにすることが当初、想定されていたと福田アジオは指摘する。それはなぜか。『採集手帖』を見ると質問文がすべて見開き二ページの左側ページの隅に一行ないし数行

で印刷されていて、残りは空白となっている。また右側ページは白紙となっており、要するに回答が長くなれば調査項目のあるページの白紙のページに書き記すことができるようになっていたのである。さらに調査項目を印刷した各ページの上部には質問番号が大きく付され、それぞれ調査年月日、調査者氏名、調査地名を書くようになっていた。全部で百の調査項目ごとに個別にこうしたデータを書き記すようなページ構成をとっているわけで、ページを切り離せばそのまま一つの調査項目に対応したカードとして使えるようになる。質問の番号ごとにそのカードを集めれば、各地の調査結果をすぐさま比較できる。柳田が『民間伝承論』で構想した重出立証法を具体化するための調査法だったと福田は指摘する（福田 二〇〇九 一二五）。

個別の事項ごとに民俗語彙を単位として調査を行うという手法は、『民間伝承』誌上で提示された「採集要項」欄や「共通課題」欄のそれと同じだ。また全国規模で同質の調査データを求めることが喫緊の課題として受け止められてもいた。そうしたこともあり「山村調査」での試みをより広く民間伝承の会会員が共有するよう、呼びかけが誌面上でなされていく。

『民間伝承』を見ると、「山村調査」に携わっている木曜会同人、大間知篤三の一文がすぐさま第二号の巻頭に掲げられているのが目にとまる。「民間伝承論」から「民間伝承」まで」と題したのがそれだ。大間知は木曜会同人による「山村調査」に至るまでの経緯や、その重要性をあげ、さらに民間伝承の会誕生にまで言及する。そして最後に「山村調査」の事業は民間伝承の会全体の事業となりつつあるとし、「我々は此の会によって、現在進行中の山村調査よりも、遥かに広範な、充実した、徹底した、全国に及ぶ、統一調査の遂行し得る日の近きことを、希望し

且つ確信して居る」と締めくくった「大間知 一九三五 一」。すでに『民間伝承』創刊号では一ページにわたって「山村調査」での調査項目百が、抄録という形ではあれ紹介されており、読者は調査の意義をより具体的に受け止めることができたであろう。

さらに第八号には昭和一一年度版の『採集手帖』の頒布案内が掲げられている。「本手帳は会員諸氏からの御希望が多いので本年度分は一般諸氏に頒つことになりました」とあることから、その需要はかねてからあったことがうかがえよう。「十部以上は二割引」という一節からは、地方の会員がまとめて購入し互いに調査に協力し合うことが想定されていたのが読み取れる。

木曜会同人以外にも調査者の層を広げてデータの充実化を一層目指す意図は、翌九号の巻頭に置かれた柳田の「採集手帳のこと」からも強く伝わってくる。柳田は今回の頒布だけではなく、より一般的な多数の採集者向けに『昔話採集手帳』『年中行事採集手帳』『民謡採集手帳』『海村生活語彙採集手帳』を現在、準備中だという。さらに民間伝承の会の任務はこうして集められたデータを整理し、「最も精確なる総合記録を作成し、財政の許す限り之を印刷して世に保存することである」。そのために通り作業が済めば、自ら書き込んだ『採集手帖』を会へ貸与、あるいは副本を作成して会へ寄託するよう、読者に呼びかけた（「柳田一九三六 一」。地域あるいはテーマごとに偏差の著しい資料のあり方を是正し、重複するデータを整理して全国的に概観できるようにするのが「山村調査」の大きな目的だった（「岩崎 一九八六 七五」。読者を巻き込んでその実現を図るための提言がこの柳田の一文なのである。

とはいえこうした呼びかけにもかかわらず、『民間伝承』誌上を見るに読者の反応は思いのほか、鈍い。先の大間知篤三の呼びかけのあった

次の号、第三号の「会員通信」欄を見ると、柳田の『郷土生活の研究法』を頼りに「山村調査」の項目から二、三を選んで調査をしたという報告、また「山村調査」での調査地の選定法について具体的教示を願う声が掲載されてはいる。だがそれ以後、「山村調査」の項目に従った報告は、木曜会同人以外からなされることはなかった。

また『採集手帖』が頒布され、その成果を会に提出するよう柳田が呼びかけたにもかかわらず、木曜会同人以外による調査地は一四ヶ所にとどまった。「山村調査」の最終報告書『山村生活の研究』末尾に掲げられたその一四ヶ所の調査者氏名は、合計一五名。このうち山形県西置賜郡で調査をした大島正隆は、昭和一一（一九三六）年に東北帝国大学法文学部国史学科に入学し、一三年に引き続き柳田のもとで、「海村調査」に参加している（「大島 一九八七」。また群馬県利根郡で調査をした牧田茂は折口信夫に師事していた國學院大学在学中に木曜会同人となり、同じく「海村調査」の一端を担う。この二人は山村調査を契機に、民間伝承の会により深くかわりを持つにいたった。昭和一〇年から一四年にかけての五年間、『民間伝承』に掲載された「会員通信」欄への報告の数は大島が五本、牧田に至っては一五本にも達する。だがその一方で残りの一三名についていえば『民間伝承』にこの間、一本の報告をも寄せなかった者が九名の多きに達する。民間伝承の会では投稿者の内、一過的な参加者がかんがりの比率に達していたが（「矢野 二〇一〇 一三」、事態はここでも同じだ。

その一方、「山村調査」に参加した木曜会同人による『民間伝承』「会員通信」欄への報告、あるいは「学会消息欄」からはその活発な活動の様子が伝わってくる。

昭和九年度『採集手帖』の趣意書の後には、「郷土生活研究所」同人

の氏名が掲げられている。日本学術振興会に助成金を申請する際、申請した団体名が郷土生活研究所であり、その同人は実質的に木曜会同人とみなして差し支えない。ここに掲げられている氏名を五十音順にあげると池上隆祐、大藤時彦、大間知篤三、金城朝永、倉田一郎、小寺廉吉、後藤興善、今和次郎、桜田勝徳、佐々木彦一郎、関敬吾、守随一、杉浦健一、高橋文太郎、橋浦泰雄、比嘉春潮、松本信広、最上孝敬、山口貞夫、柳田国男の二〇名となる。翌一〇年度の『採集手帖』に掲げられた同人氏名には、さらに瀬川清子と鈴木棠三とが加わって二二名を数えるにいたった。

メンバーを見ると最年長に属するのは還暦を間近に控えた柳田を除けば、明治一六（一八八三）年生まれの比嘉春潮と、同二二（一八八八）年生まれの橋浦泰雄だ。特に橋浦は過去十年に及ぶ経験を積んだ練達の採集者であり、その『採集手帖』は書き漏らしがないだけでなく、全ページにわたって記録に埋め尽くされたものとなった〔鶴見 二〇〇〇—一三一〕。

しかし鶴見太郎が作成した木曜会主要メンバーの経歴や生没年、柳田との関連等の一覧を見ると、一方で二〇代から三〇代にかけての若手がメンバーの大半を占めていることに気づく〔鶴見 一九九八—三四〕。このメンバーは柳田の民間伝承論の会に参加していた者に加え、日本学術振興会からの助成にあたって知名度があり柳田とかかわりのある学者をも加えて構成されていたと、大藤時彦は回顧している〔大藤他 一九九〇—三四〇〕。大藤は具体的な氏名を挙げてはいないが、東京帝国大学で地理学を専攻した佐々木彦一郎と山口貞夫がおそらくそれに該当しよう。明治三四（一九〇一）年生まれの佐々木は「山村調査」の開始以前に、すでに『人文地理学提要』『経済地理学研究』『村の人文地理』と

いった専門書を上梓していた三〇代半ばの少壮気鋭の研究者である。また佐々木の紹介で柳田と接点をもった山口は、明治四一（一九〇八）年生まれでまだ二〇代であったが、すでにブラーシユの『人文地理学』を翻訳する実力の持ち主だった。

こうした専門的な訓練を経た者がいる一方、調査経験という点では初心者も交えていたのが木曜会同人の構成である。その学んだ専門分野もドイツ文学、経済学、史学、宗教学、国文学と多岐に及んだ。明治三二（一九九九）年生まれの間敬吾は、調査経験がなかったこともあって最初に行った大分県の村ではまったく調査ができず、仕方がなく宿屋の天井を見て寝ていたという。だれか他の人に替えてほしいと柳田に電報を打ったところ、折り返し調査の方法について書かれた長い手紙が送られてくる。しかし結局、調査ノートには何も書かれぬまま帰路に着いた。ようやく二回目の調査先で、関はやりがいを感じるにいたったという〔大藤他 一九九〇—三三四〕。

関敬吾は別の場で、木曜会のメンバーは新しく民俗学を研究しようとする人がほとんどで、木曜会の場合は調査の報告とそれに対する質疑をし、柳田が説明を行う機会となつて皆熱心に参加したと振り返る〔関 一九八一—一〇〇〕。そうした熱気は最上孝敬の回想でも同様だ。関と同じ明治三二（一九九九）年生まれの最上は、当時三〇代半ば。「民俗について学びだした当初の採集旅行ほど魅力にあふれたもの、人を夢中にさせるものはすくない」という。民俗の魅力に取りつかれて調査中は記録の整理などのため夜眠る時間を削りつつも「生涯このような仕事を続けても悔ゆることないという思いがした。そうした採集結果の報告は、報告する当人も、それをきく人々も、みな胸はずませ、活気の溢れるものであった」と思い起こす〔最上 一九七五—二二〕。

調査への熱気は『民間伝承』誌上では、まず「会員通信」欄への投稿として表出した。昭和一〇（一九三五）年の創刊号から、調査の最終報告書『山村生活の研究』の刊行案内が掲載されている昭和一二年の第二卷第一〇号までの間、『民間伝承』誌上から木曜会同人による「山村調査」関連の報告を数え上げると、全部で二四回。報告者数は一名となる。このうち最も投稿回数が多かったのが大間知篤三で五回、ついで杉浦健一の四回、桜田勝徳の三回、大藤時彦、倉田一郎、関敬吾、最上孝敬の二回と続く。一回だけではあれ投稿した者は守随一、瀬川清子、橋浦泰雄、山口貞夫だった。

投稿内容を見ると調査の日程や訪問先等を簡単に記すもの、あるいは調査での問題発見の提示、またデータを比較しつつ読者へ応答を呼びかけるものと大きくいえば三分類できる。

たとえば問題発見と呼びかけの双方を含む一例として、『民間伝承』第六号での関敬吾の一文をあげたい。近江での宮座と神行事の調査では宮座と村落生活との関係、氏姓によつて座を異にする家の婚姻関係、移住者が座に加入する場合の慣行、集落の戸数や人口が座に及ぼす影響などに注意して見たと関は述べる。いずれもが直接、「山村調査」の調査項目にはない事項だ。だがそこでの項目を糸口として独自の問題発見をしたことが、一文からは伝わってくる。さらに関は集落ごとに変化があるので多くの類例を見る必要があるとし、他の事例を提供するよう読者に呼びかけて締めくくっている。

第四号に掲載された橋浦の一文も同じような一例だ。橋浦は佐賀県の調査地で、村組のことをカドと呼ぶのを知ったという。そこから木曜会同人の桜田勝徳による鹿児島県での類似事例を示し、さらにカイト（垣内）の転訛ではないかという柳田の説を紹介したうえで、「いずれにし

るもつと資料を得たいものです」と読者に呼びかけて橋浦は報告を終えている。

資料を求めるこうした呼びかけは「会員通信」欄を見ると、木曜会同人以外の一般会員による投稿でも頻繁になされていた。その意味で「会員通信」欄では木曜会同人とその他の会員とは、共にフラットな関係にあるかに見える。だがその一方で木曜会の動向は、『民間伝承』の「学会消息」欄に逐一紹介されていたことも確かである。たとえば創刊号の「学会消息」欄を見ると、八月二五日の木曜会では一八名の出席者を得、橋浦と杉浦健一の「山村調査」の報告があったことを伝える。そしてその次の九月八日の木曜会では最上、関、瀬川、大間知の報告があり、さらにオランダライデン大学の日本学教授が熱心に参加したとも記す。以後も木曜会の活動内容は、毎号読者に提示されていく。柳田を中心とした「中央」が、こうした形で視覚化されていくのを誌面から読み取ることとは容易だ。一般の会員と木曜会同人とはこうした形で、誌面上で線引きされていく。「中央」と「地方」という構図が、誌上を通じて次第に明確となつて読者の目に映じていったことは否定できない。

『民間伝承』第四号の巻頭に宮本常一は「採集者の養成」という文章を寄せている。「民間伝承の会設立の目的は採集事業の組織化にあつたと思ふ」と述べる宮本は、その養成方法について採集項目の設定とその手引きがまず必要だという。『採集手帖』から「六 村で新しく始まつた職業は何と何ですか」を例に、そのままこれを聞いて要領を得なかつたのに対し、「昔はどんな夜業をしたか」と質問を変えてよい結果を得たという自己の体験談からの提言だ。それは「山村調査」の調査項目に従つて調査をする際、一定程度以上のノウハウが必要だったことを、改めて示している。そのための手引きを与える側、そして逆に受け取る側

というヒエラルキーがここでは要請されているのだ。さらに宮本は講演会や講習会の開催が重要だと続ける。具体的に「講演会は中央から採集に出た人々が、その途次を利用して一日をさいて頂きたいと思ふ」とし、地方側の仕事は第一に談話会を盛んにすることだと提言した（宮本一九三五 一）。地方の研究体制を整えたいうえで、中央の指導を仰ぐことがここでは自明視されている。

『民間伝承』の誌面構成は、読者への呼びかけと応答の回路を内包したものとなっていたことは確かである。だが一方で柳田のもとで「山村調査」を担っていた木曜会同人とそれ以外の読者を隔て、一定のヒエラルキーのもとに配置しなおそうとする力学が作動していたことも見落としてはなるまい。それは「中央と地方」から構成された民俗学としての研究体制確立の一面である。

二 木曜会同人の働きかけと地方での受容

宮本常一は、中央から調査に来た者がその間に地方で講演会を行うことを要請した。地方末端に至る民俗学研究の組織化が進展した背景には、地方と柳田とを結ぶ木曜会メンバーの存在があったという指摘はすでに鶴見太郎がしている（鶴見一九九八 六三）。全国各地に木曜会同人が足を運ぶ「山村調査」では、どのように双方の交流がなされていたのか、ここで取り上げたい。

昭和一〇年以降、『民間伝承』に刺激を受けて各地で民俗学関係の雑誌が相次いで創刊されていく（鶴見一九九八 三二六）。そうした中で『民間伝承』創刊よりもいち早く発刊されたのが、高志路会による『高志路』だ。木曜会同人とも早くから接点を持った同誌誌上から「山村調

査」実施期間中の木曜会同人や柳田の動向について、拾い上げていこう。以下、同誌上からの引用に関しては、その末尾に巻号とページを付して該当箇所を示すことにする。

「土俗学は一般の協力を得なければ到底研究の満足に行かないこと」から高志路会は発足した。そして「民間伝承のやうなものは現在之を集めて置かなければ往々散逸の虞れがある」として、「会員との思想的交通を拡充」するための機関誌として『高志路』を位置付けている（一卷一号、四一）。その趣旨は民間伝承の会のそれと、ほぼ軌を一にするものだ。同誌は月刊で、編集役を担ったのは小林存^{なごう}。小林は第一回目の日本民俗学講習会にも出席しており、それだけに柳田から受けた影響の大きさは想像に難くない。

昭和一〇（一九三五）年の『高志路』創刊からほどなくして、誌面の「消息集」欄には柳田国男からの手紙が紹介されている。小林が柳田宛に、創刊号を早速送付したのだろう。「高志路会の誕生よろこばしく存候雑誌拝受御礼申上候諸君の仕事は在京諸同志にも大なる刺激に之有候」と、礼が認められてある（一卷三号、四二）。これが誌面上での柳田との最初の接点となり、以後、両者の関係が続いていく。

中央との交流は手紙のやり取りだけではない。「山村調査」で昭和一〇（一九三五）年に県内東蒲原郡東川村を調査地とした最上孝敬はその途上、新潟市内で高志路会会員との交歓を果たす。『高志路』誌上を見ると二四日に急遽、最上を迎えて集まりを催したことを伝える。「柳田先生門下の木曜会重鎮」と紹介された最上は、東川村での「貴重な蒐集を携へて新潟に」立ち寄ったという。「中央斯界の空気を徹底的に我等に吹き込んで頂いた点に於いて極めて有益な会合であった」と、その意義が誌上で強調された（一卷九号、三九）。ここからは各地に足を運ん

だ木曜会のメンバーが、「中央」の意向を伝える役割をダイレクトに担うものとして受け止められていたことが伝わる。

同じ号の末尾には、新たに発足する民間伝承の会の趣旨書の紹介にページが費やされている。そこに掲げられた世話人四名のうちの一人が、小林存である。民間伝承の会世話人の顔ぶれをみると、地方在住者が七名と全体の半数。小林をはじめ、長野県の胡桃沢勘内、大阪府の沢田四郎作、山口県の宮本常一、熊本県の能田太郎等、当時、地方にあって柳田と強いつながりをもっていた人物が顔を並べている。その意味で小林が編集を担った『高志路』の動向は、民間伝承の会に強く影響される要素を当初から内に含むものとなっていた。

木曜会同人として高志路会に最初に接点をもった最上孝敬は、以後もその関係が続けていく。東蒲原郡での「山村調査」の成果を、さっそく『高志路』巻頭に七ページにわたって掲載（二巻一〇号）。また柳田国男も引き続き、自らの原稿を寄せる。次の一一号の巻頭「午餉と間食」がそれだ。冒頭で柳田は「小林君の方言考初稿に存録せられて居らぬのを見ると、あるいは越後でももう消滅したのかと思ふが」と小林の研究に言及し、高志路会とのきずなを読者に訴えかけていく。木曜会のメンバーや柳田が『民間伝承』誌上だけでなく、個々の地方雑誌誌面を通じてその読者に直接、メッセージを発していくという二重の呼びかけの構図がここからは浮かび上がる。

翌昭和一一年の『高志路』第二巻を通読すると、直接間接を問わず交流がさらに続いていたことがわかる。まず第二巻第五号表紙の見返しには「郷土学研究会開催」として、最上さらに柳田を招いた講習会の予告を大きく掲載。「近來郷土の学術的再認識が盛んに説かれてゐるがその研究法或は資料の採集は既に完成されてゐるのであらうか」と問題提起

をし、「日本民俗学の泰斗柳田国男先生並に曾て本県東蒲原郡山村の聚落状態を詳細に調査された明大教授最上孝敬先生」と、講師の二人について紹介。県内での「山村調査」の実績が最上の紹介のポイントだ。さらに同じ号の「編輯局より」では、四月の例会で折よく佐渡に昔話調査で訪れていた木曜会の鈴木棠三を迎えたことを記す。柳田が近く山の神信仰とオコゼについて執筆するので、関係する資料があれば提供を望むと鈴木は伝えたという。活字では知り得ない柳田の近況と学問の動向が、その門下から直接、耳にできる機会となった。「鈴木君より中央に於ける日本民俗学発展の現状を聞き十時半散会」と、会の雰囲気伝えていく（二巻五号、五〇ページ）。木曜会のメンバーを通じて「中央」と接点を持つという構図は、ここでも同じだ。

逆に地方在住者が「中央」に足を運んで接点を持つケースもある。この昭和一一（一九三六）年に東京で開催された第二回日本民俗学講習会を受講したのは当時、新潟商業学校教諭だった長谷川正。長谷川はその感想として「民俗学的研究によれば吾々の郷土研究の活動分野はズット拡大される事になる」「この方法によればまだまだ勉強すべき部門が残されてゐた事が判り、つくづく受講してよかつたと思つた」と述べている。会期中、宿として厄介になつたのは講習会の講師を務めた鈴木棠三宅。また最上孝敬に招待されて激励を受けたことを、長谷川は伝えている（二巻九号、五三ページ）。鈴木、最上共に新潟で高志路会会員と交歓の場をもった木曜会同人だ。地方の者が上京した折、今度は関係する木曜会同人が応対してその交流を深めていたことがわかる。

木曜会同人や柳田の働きかけが具体的な調査として展開されていったのが、新潟県師範学校郷土室での取り組みだ。『高志路』第二巻第九号末尾には「共同採集を望む」と題し、小学校教員に児童を利用した調査

の実施を訴えた。新潟県師範学校では昭和一一年度の夏期休暇期間中、同校の生徒を動員してすでに調査を行っており、さらにその成果を広げるための呼びかけである。その調査項目は「山村調査」で使われた『採集手帖』をもとに、全体をコンパクトに切り詰めたものといつてよい。「一、村（部落）の起りについて何か云い伝へがありますか」から始まり、「二十三、郷里にある碑文を写して出して下さい」で項目は締めくくられている。「山村調査」が新潟県での調査実施に大きな影響を及ぼしていたことが、ここからうかがえよう。

その後、昭和一三（一九三八）年には、百項目からなる『郷土研究入門手帖』が小林存の編集によって刊行。これは『採集手帖』や『民間伝承』誌上を参考として調査項目が作成され、各種学校の生徒による調査も意図されてなったものだ。「類型」「家族制度」といったように一ページ単位で質問の見出しが付けられ、具体的に何を調べればいいのか、解説が付く。『採集手帖』と比して、より初学者向けではあるが、体裁自体は『採集手帖』のそれを踏まえたものだ。

こうした新潟県での動向は「山村調査」を通して柳田以下、木曜会同人が与えた影響の大きさを物語る。たとえば柳田が必要とする資料は何か、鈴木棠三が高志路会場で伝えてデータを求めていたことは、「中央」と「地方」の分業体制が民俗学の成立とともに作り上げられていったという、従来の学史のイメージに沿う。「山村調査」はそうした「中央」と「地方」の関係性を、具体的に編み上げていく大きな契機となったように見える。だが全国的な動向を俯瞰した場合、新潟県は例外的なポジショニングにあったことに気付かざるを得ない。

昭和三三（一九五八）年に刊行された『日本民俗学大系11 地方別調査研究』は、各都道府県ごとに民俗学の展開について紹介している。そ

れによれば「山村調査」で木曜会同人や柳田が地方に訪れたのを契機に研究が展開していくというケースは長崎県、福岡県、鳥取県を数える程度にすぎない（大間知他 一九五八）。その福岡県にしても、事柄が一枚岩ではなかったことは重信幸彦が明らかにしている通りだ（重信二〇〇九）。『民間伝承』誌上には一般会員からの「山村調査」関連の報告はほとんどなかった。そうした事態とほぼ軌を一にしていることになる。全国的に見れば、「山村調査」の及ぼした影響は思いのほか、小さい。

昭和一一（一九三六）年刊行の『高志路』第二巻第八号の「消息集」には、宮本常一からの手紙が紹介されている。そこでは地方雑誌の動向にも触れられており、「小倉の豊前、神戸の近畿民俗、飛騨のひだびと、越後の貴誌、大体柳田先生の学問の色彩を持つ雑誌が歩調をそろへた」というコメントが付されていた（五七ページ）。たしかに『高志路』誌上からは「山村調査」に関連して木曜会同人が来訪し、交歓を図る様子が伝わってきた。だが他の雑誌の誌面では事情はどうなのか。『豊前』は重信の指摘があるように、柳田との関係は必ずしも一枚岩ではなかったので除外するでしょう。他方、柳田の影響が色濃いとされた『近畿民俗』と『ひだびと』誌上には、「山村調査」の影響はどのように反映されていたのだろうか。

『近畿民俗』は昭和一一（一九三六）年から刊行。創刊号巻頭に柳田が「成長は自然」と題して一文を寄せているように、柳田とのかかわりは当初より深い。昭和一二（一九三七）年に第二巻第二号を刊行した後、戦後まで休刊となった同誌はこの間、八冊を上梓している。柳田が寄せた原稿は六回にもおよび、ほぼ毎号のように掲載されていた。それだけ柳田も力を尽くしていたことになろう。しかしその一方で木曜会同人の

寄稿は、第一巻第六号誌上の大間知篤三「採集方法の種類」に限られた。そうした寄稿が極めて少ないのに加え、『近畿民俗』ではそもそも「山村調査」に正面切つて言及した文章がほとんどない。その意味で『高志路』の場合と状況は大きく異なる³⁾。

一方、『ひだびと』ではどうか。飛騨考古学会の機関誌『石冠』を『ひだびと』と改題し、新たに月刊誌として出発したのは昭和一〇（一九三五）年から³⁾。江馬修、三枝子夫妻が編集役を担う同誌に柳田の名前が初めて登場するのは、昭和一〇年の「編輯部だより」欄である。『ひだびと』を柳田に寄贈したのだろうか。その礼について触れた一文だ。

「郷土研究の宗家と言はるゝ柳田国男先生は、「異常に興味多き雑誌となりよろこばしき限り」とお褒め下さつたばかりでなく、そのうちに御執筆下さるとのお言葉まで頂きました」と江馬三枝子は記す。雑誌というメディアを持つ、互いに交歓を深め交流する広場の性格を熟知した柳田らしい対応が、ここからは浮かび上がつてこよう。

とはいえ柳田の寄稿は結局、昭和一二（一九三七）年まで持ち越されることになる。木曜会同人で最初に原稿を寄せたのは、橋浦泰雄となつた。昭和一一（一九三六）年の第四号誌上に、「民間伝承の会幹事」の肩書で「首途のその頃」と題した一文を橋浦は掲載。これは十年以上前に行つた岐阜県内高根村の調査報告が主題である。以後、この題名で合計五回、連載を続けた。さらに橋浦は調査に合わせてこの年、高山市を訪れて『ひだびと』関係者と座談会の間を持つたことが、同じ年の第六号「編輯部だより」からは読み取れる。それによれば地元の食堂の離れを会場とし、二〇人ばかりが集まり盛会となつたという。また大間知篤三も同年第八号に「夫婦杯覚書」を寄せている。このように昭和一一一年になると、木曜会同人の寄稿が次第に目につくようになった。

「山村調査」関連で途中、立ち寄つたのは最上孝敬である。昭和一一（一九三六）年の『ひだびと』第一〇号「編輯部だより」によれば、高山に立ち寄つたものの一泊限りなので座談会を開くことも出来ず、八幡社の盆踊りや白河踊りに案内した程度に終わったという。その代わり同年の第一二号から「赤尾谷桂見聞」と題して、「山村調査」の成果の連載が四回にわたつて続く。

「山村調査」が終了した昭和一二（一九三七）年ともなると、『ひだびと』と木曜会同人との接点はより一層、密となつたことが誌面からは読み取れる。柳田自身がこの年の第三号によろやく「団子浄土」を寄稿。さらに七月三日には高山市で講演を実施するに至る。その講演筆記は第八号に「飛騨と郷土研究」と題して掲載された。末尾の「編輯部だより」に目を通すと、当日は午後三時から百名ほどの参加者を交えた座談会、その後五時から市長主催の有志歓迎会、七時から講演会へと続く多忙なスケジュールとなつていた。柳田を迎え入れる『ひだびと』関係者の熱意と歓迎が、ここからは伝わつてこよう。

とはいえ「郷土研究雑誌」と銘打つた『ひだびと』が、柳田の意向に沿う民間伝承関連の記事ばかり、掲載していたわけではない。発行者名が飛騨考古学会名義となつていようように、考古学関連の記事が占めた比重にも少なからぬものがあつた。また木曜会同人との交流が次第に深まつていったにもかかわらず、「山村調査」の調査項目を下敷きにしてなされた報告は『ひだびと』誌上からは見いだせない。その点で「山村調査」を参考にして自ら『郷土研究入門手帖』を編集した『高志路』のスタンスとは、大きな隔たりを見せる。こう見ていくと柳田や木曜会メンバーが、調査の視点や方法という点で『ひだびと』関係者に与えた影響は、限定的なものだったと言わざるを得ない。

にもかかわらず、『ひだびと』関係者がこうした「中央」との接点を重視した理由は何だったのか。この間の事情の一端を論じる前に、当時の柳田国男が社会的にどのようなポジションにあったのか、改めて触れておきたい。

柳田はすでに郷土研究の大家としての知名度を確立していた一方、東京朝日新聞社に大正八（一九一九）年に客員として入社し一三年には編集局顧問に就任していたように、ジャーナリスト的な立場にもあった。その後、昭和七（一九三二）年に退社してはいたものの、しばしば『東京朝日新聞』に寄稿し、あるいは取材対象となつて取り上げられ続けた。

たとえば「山村調査」開始の前年昭和八（一九三三）年の紙面では、一月三日から三日間にわたつて「おかしん三題」というタイトルで、餅についての民俗談義が繰り広げられている。また七月二四日付のラジオ番組欄では、富士山山頂からの中継番組の一環として、「講演 霊山と神話」の放送概要が柳田の顔写真付きで掲載された。正月あるいは富士山山頂といった印象的な時や場面で、柳田の記事が求められていることが伝わつてこよう。また九年三月二八日には、やはり顔写真付きで「私の好きな行楽地を聴く」という連載記事にその談話が取り上げられている。「五十疊敷もあらう」といふ洋館の書齋兼応接間、入口を除いた三方が二重にも三重にもギツシリ本がつまつてゐる。その中に埋もれながらのお話である」と、記者は柳田邸の様相を記す。ジャーナリスト的な観点でありながら、数多くの書籍に囲まれて多様な話を日常生活から引き出す碩学としての姿が、紙面を通じて浮かび上がってくる。

すでに拙稿で述べたように「矢野 二〇〇九」、当時、郷土研究という名目のもとに、歴史学、地理学、考古学など複数の知が覇権を競い合

う事態が各地で生じていた。そうした状況のもとで、柳田というネーム・ヴァリューは地方で郷土研究を営む者にとつて、大きなものであつたことは間違いない。『ひだびと』の編集にあつては江馬修にしても、事態は同様だった。江馬が橋浦泰雄にあてた手紙の一節は、その意味で興味深い。鳥取県立図書館所蔵の昭和一二（一九三七）年五月一日付書簡（資料番号291・5）の一節には、こうある。柳田の講演に関する内容だ。なお手紙文には適宜、句読点を打った。

この夏か秋頃、柳田氏と外一兩名で高山で講演会をやつて頂けたら大変に有難いと思ひます。何と云つても当地には史談会が十余年つづいた伝統がありいかに僕たちが今急進に克服しつつありとは云へ、なほ古い連中があちこちにゐて僕たちの仕事を苦々しい顔付で睨んでゐるわけです。もちろん僕は彼らを征服しおほせる自信はあるが、もし柳田氏が当地で郷土研究の新方法について自ら説いて頂ければ、結果はより早くよい実を結ぶに違ひないと思ひます。ぜひこれについて貴兄のお骨折を願ひます。

当時の輻湊した郷土研究をめぐる状況の中で、自らが主導権を握るにあつて柳田が切り札として認識されていたことが、文面からは伝わってくる。一面ではそうした橋渡し役として木曜会同人が期待されていたのが、ここからは読み取れよう。郷土研究をめぐる覇権争いの様々な思惑も絡み合いながら、地方は「中央」と接していたわけである。それがゆえに「山村調査」を通じて民間伝承の会会員全般の問題意識を高めることは、実際にはなかなか進展しなかつたということになるのか。柳田と木曜会同人の多様な働きかけに対して、その受け止め方は一様ではな

かった。

三 「山村調査」報告のメディア展開と多様な方法論の錯綜

「山村調査」は木曜会同人と地方とを結びつけるための一つの契機となりえたことは、確かだ。しかし実際はどうかといえは、そうした役割を果たしたケースは思いのほか、少ない。運動論的な視点に立てば、その効果は結果的にいえば限定的だったのである。

しかし「山村調査」を運動論的に見れば、木曜会同人による直接の交流だけにとどまらない動きがあったことも見落としてはなるまい。いまひとつ目を向けなければならないのは、『民間伝承』以外の新聞や雑誌を通じた成果の発表だ。こうした活字メディアでの展開がどのようなものだったのかを問うことで、当時の民間学が推し進めていった運動論の一端が見えてこよう。

活字メディアの効果的な活用を図ろうとする姿勢は、たとえば橋浦泰雄宛の守随一の手紙から伝わってくる（鳥取県立図書館蔵・資料番号898・5）。昭和一〇（一九三五）年一〇月二八日付の書簡で、「山村調査」の報告書に関するものだ。それによれば「成るべくやさしい文字と柔な表現と用いる方針。文語調撇文調を改め、書信調にしたこと」と、まず文体について言及がある。さらに「趣意書は『民俗学の玄関』にも入らぬ人もも動員し、こちらの陣営に参加させるために簡単に民俗学の何たるかを知らしめる必要があること」とあり、活字を通じた運動論に対して戦略的スタンスが文面からは読み取れる。

調査の最終報告書『山村生活の研究』の「経過報告」に目を通すと、調査の一端が『日本民俗学研究』『民間伝承』『山林』『現代農業』『地理学』『旅と伝説』『方言』『東京朝日新聞』に発表された、とある。いく

つものメディアを通して、その成果が随時報告されていたわけである。しかも掲載した雑誌の分野を見ると、多岐にわたって一つのカテゴリーにとどまらない。当時、農林省の補助のもとに、東京帝国大学農学部、島田錦蔵他による山村実態調査が実施されていた。山村経済更生という目的で、アカデミズムの側からも調査が併行していたのである。だがその成果は報告書以外では『山林』と『日本林学会誌』にしか、掲載されていない。より一般的な雑誌という点では、『山林』への掲載にとどまる。「山村調査」の成果の露出がいかに著しいものだったか、この一事からして理解できよう。先の守随の言葉を引けば、「民俗学の玄関」にも入らぬ人もも動員し「ようとする戦略の一端として、受け止めることもできそうだ。アカデミズムと民間学との違いが、ここからは端的にうかがえる。

あらためて「山村調査」の経過報告の発表媒体を振り返ると、それは柳田の幾重にも張り巡らされたネットワークのもとに選びだされていることがわかる。自ら社員であった『東京朝日新聞』、柳田が立ち上げの当初から関わっていた『民間伝承』はいずれまでもなく、それ以前から数多く原稿を寄せてきたのは『旅と伝説』であった。また『山林』はどうかといえは、すでに昭和七（一九三二）年に柳田は「山村語彙」を同誌に連載しており、その発行元である大日本山林会から同年に『山村語彙』として刊行するという経緯があった。さらに九年には連載を再開して、翌一〇年に『山村語彙続編』を上梓するといったように、そのかわりは深い。

『方言』は方言研究会から昭和六（一九三一）年に創刊された雑誌だ。東條操の『方言採集手帖』の刊行を機に昭和三年に設立された同研究会には金田一京助、上田万年らに加え、柳田が参加し主要メンバーとなっ

表1 「山村調査」関連雑誌・新聞別掲載数

	『旅と伝説』	『方言』	『地理学』	『山林』	『現代農業』	『朝日新聞』	計
大藤時彦	1	1		2	1	1	6
大間知篤三	3	1		3	1	1	9
金城朝永	2			1		1	4
倉田一郎	1	1	3	3	2	1	11
小寺廉吉	1						1
後藤興善				1			1
桜田勝徳	1	1		1	1		4
佐々木彦一郎	1			1		1	3
瀬川清子	5	3		3	1	1	13
関敬吾	1			2	1		4
守随一	1			2	2	1	6
杉浦健一	1		2	2	1	1	7
橋浦泰雄	1	2		2	1	1	7
最上孝敬	1	2		3	2	1	9
山口貞夫	1		2	2	2	1	8
計	21	11	7	28	15	11	93

ていた。その意味で『方言』は柳田のアカデミズムネットワークがらみの雑誌として、位置付けられる。また『現代農業』は大日本農機具協会の機関誌で、協会の顧問には農林省関係者の名前が多数、並ぶ。農政学を専攻としていた柳田と同誌とのつながりは、こうしたネットワークと関わりがあるのかもしれないが、今一つ明確ではない。昭和一〇（一九三五）年の第一巻第七号に柳田の「田植唄の話」が巻頭に掲載されているのが、その初出である。唯一『地理学』についていえば、これはどちらかというところ東京帝国大学で地理学を専攻した佐々木彦一郎、山口貞夫との関連を指摘すべきであろう。

柳田が絡む幾重ものネットワークのもとに、「山村調査」の経過報告は数多くの発表の場を得て、様々な人の目にふれることになった。機関誌『民間伝承』以外の『山林』『現代農業』『地理学』『旅と伝説』『方言』『東京朝日新聞』でいえば、柳田以外の木曜会同人の手になる「山村調査」関連の記事は、表1にあるように昭和九年から一二年初頭にかけての期間で総計九三点^⑤。内容に目を通すと雑誌の性格に応じて、木曜会同人の記述スタイルは異なっていた。個別の雑誌ごとに「山村調査」の成果がいかに報告されていたのか、見ていくことにしたい。

民間伝承の会が発足するまでの間、柳田も含めて木曜会同人が原稿を寄せる機会が多かった雑誌の一つが『旅と伝説』だ。ここではとりわけ「山村調査」が開始された昭和九（一九三四）に、その報告の掲載が集中している。かかわりの深さゆえか、まず同年一月号は巻頭に「山村スナップ」と題して、木曜会同人一二名の記事が掲載されている。冒頭では「柳田先生の山村調査の同人諸氏にお願ひして、各自の調査せられた部落に就いての感想を書いていただいた」とその経緯を記す。スナップとあるようにそれぞれが写真を一枚寄せ、ページ数も一から二といっ

た手短なものである。そのためだろうか、全体に調査地での印象記の域を出ない内容が多く、「山村調査」の目的、手法の独自性への言及はない。読者はこの連載記事を読んでも、取り立てて「山村調査」について得るところはなかったろう。

その一方で個別の調査地についての報告は、「山村調査」の具体的な成果を読者に印象付けている。最初の掲載は大間知篤三による「常陸高岡の年中行事」で、昭和九年九月号誌上である。「柳田先生を中心とした郷土生活研究所の山村生活調査の一員として」参加したと冒頭で経緯を述べた大間知は、元旦から暮れまでの一年間の行事を順次、取り上げた。行事名の多くが民俗語彙としてカタカナ表記になっているところに、「山村調査」での調査手法を見て取ることができる。また同じ号には大間知に続いて金城朝永が「山峡の村」を掲載。「村の食物」「墓と葬式」「道祖神」「村の事件」など、『採集手帖』の項目に対応した見出しに従った記述となっている。やはり民俗語彙をカタカナ書きとしているのが特徴だ。しかし金城の場合、役場による『村況報告』から戸数や人口、特別税戸数割といったデータを引用しているのが目を引く。この手のデータは「山村調査」で必要とされてはいなかったからである。調査手法が担当者によって実際には異なっていたことが、ここから読み取れよう。

金城だけではない。「山村調査」に従事しつつも、そこでの調査項目から大きく離れた内容となっているのが、山口貞夫の「山村土地の地理的考察」だ。ここでの目的は「此の山村の土地利用と土地所有の問題を考察して、山村地理の一資料たらしめるにある」と、山口は自らの地理学的立場を堅持する。本文を見ても「山村調査」への言及がまったくない、末尾におかれた付記で調査の便宜を与えた柳田への謝辞が添えられ

ているにすぎない。全体が「住民」「土地利用」「耕作」「土地所有」「外部交渉」で構成されたその記述を見ると、「山村調査」の調査項目に直接、関連する内容は一部で焼き畑にふれているほかは「外部交渉」の項に限られる。その代わり土地利用状況を示す地図、また明治二四年と現在とを田畑、宅地の筆数で比較した表、土地の村外流出の状況を示す表が本文で大きな位置を占めていた。地図や統計といった「山村調査」では求められていないデータが、ここでは駆使されているのである。山口貞夫の専門は地理学。そのモノグラフィックな調査手法が存分に発揮されたのがこの論考だ。

「山村調査」に従事した者の間に、『採集手帖』を携えた調査手法について共通認識があったことは確かだろう。しかし実際に作業の結果を見ると、担当者間に越えがたい方法的亀裂があったことは否定できない。調査の具体的手法に関わる亀裂は、より専門的な雑誌への報告を見た場合、さらにあらわとなる。『方言』と『地理学』がその例証だ。

木曜会同人七名の報告を一篇掲載している『方言』の雑誌としての方向性は、民俗語彙を重視する「山村調査」の方針となじみやすいものであったことは疑いない。桜田勝徳が同人中、最初に報告を寄せたのは昭和一〇（一九三五）年の『方言』第五巻第四号。その末尾にある「編輯後記」を見ると、同誌の側から原稿を求めた経緯が伝わる。木曜会同人中、言語に関心を持つている者も少なくないと聞き「それならばこの機関誌を利用していただいで広く一般の読者諸氏に僻村調査の意気込みとその収穫を紹介していただきたいと交渉したのであります」と編集者はいう。以後も折に触れて「編輯後記」では、同人の報告に対して好意的に取り上げた。昭和一一年の第六巻第五号では、こうした報告に対し「方言学としては特殊語彙であるが古い生活と密接な関係にあるこれ

らの語の中に、却つて新鮮な興味を惹かれるといふことは言語学の一部門としての方言研究が、今後より一層、民俗学と提携してゆかなければならぬ面のあることを感ぜさせるものでありませう」と締めくくる。語彙研究という共通の土台の上に、方言研究と民俗学とを連携させたいという強い意志が、こうした言葉から伝わって来る。

他方、『地理学』となると、事情は大きく異なる。こちらに原稿を寄せた木曜会同人は倉田一郎、杉浦健一、山口貞夫の三名で、同誌に計七本が掲載された。『方言』と両方、原稿が掲載されているのは倉田一名を数えるにすぎない。その意味で同人間の問題意識にずれや不一致があつたことをうかがわせよう。

最初に「山村調査」での成果を論じたのが、杉浦健一「人文地理に於ける民俗の役割」だ。冒頭で「目的とする所は社会生活の基体をなす地理的、物質的条件と、その上に住む住民が長い間伝承してきた生活の *formula* の総合的研究にある」と杉浦はいう〔杉浦 一九三五 六七〕。この論考の副題が「福島県大沼郡中ノ川村の社会形態学的研究」とあるように、ここでの問題関心はモノグラフィックなもので、同じ中ノ川村の二つの集落を取り上げてその差異を論じた内容だ。山村調査の質問項目に従った「村の団結」「村の起りに関する云ひ伝へ」といった項目や、民俗語彙のカタカナ表記が本文中にあることは確かである。だがここには柳田が提唱するような民俗事象の全国的な比較という観点は、全く見られない。特定の集落の個性を明かにすることに主眼があり、それは柳田の意図とはおおよそ相容れないものだ。

山口貞夫による「山村聚落の生態」もその点ではかわらない。山口は冒頭で山形県の山村を対象として「山村としての特性、殊に東北地方山村としてのそれを、如何なる程度まで具有して居るかを知らうとした」

と述べ、そのうえで「村の個性を明かにしたいのが目的である」と続ける〔山口 一九三六 a 一八三〕。「山村調査」では捨象された調査地個々の地域性に山口の関心が置かれているわけで、問題意識の違いは明らかだ。そして山口は先の『旅と伝説』掲載の原稿同様、ここでも自作別農家戸数、農家一戸あたり耕地山林面積といった統計データや地形図を交え、論を展開する。結論として「要するに安楽城村は東北山村たるの特性を顕著に示し、其等は土地所有関係、農業組織、生活の諸点から確かめられた。村内の景観構成は地形に支配せられ、同時にこれは各集落の経済状態にまで反映した」と山口はいう〔山口 一九三六 b 四四〕。地形という観点から集落の特性を論じ、さらに全国を大きくいくつかに区分して成立する「東北山村」という類型のもとに位置付けることでの視点は、日本社会全体の同一性を前提とする「山村調査」のそれとは大きく食い違う。杉浦も山口も共に『方言』誌上には原稿を寄せていないのも、ここから十分理解できよう。問題意識の隔たりの大きさは覆いがたい。

先の杉浦は明治三八（一九〇五）年生まれ。東京帝国大学文学部を卒業後、大学院に進学し宗教民俗学を専攻。「山村調査」実施期間中の昭和九、一〇年には『宗教研究』『人類学雑誌』『民族学研究』等に次々と論文を発表しており、アカデミシャンとしての王道を歩んでいた〔泉 一九五四 二六六〕。同じ木曜会同人といつても、それぞれの経歴によつて「山村調査」に対する方法論的なスタンスには越えがたい溝があつたことは疑いえない。

四 「山村調査」報告のメディア戦略の蹉跌

こうした調査に対する方法論の違いという問題が「山村調査」の実施体制の内には含まれていたことに加え、調査成果をどのように対外的にアピールしていくのかという点にも問題があったといわなければならぬ。

すでに述べたように、「山村調査」の成果は数多くのメディアを通して活字化されていった。その中でもより広範な読者層をもつのが、『東京朝日新聞』だ。そこでの内容をまず、みておこう。「一隅の生活 知られぬ山村歴訪」と題して写真付きで六段ほどと、かなりのスペースを割いた「山村調査」関連の随筆が連載されたのは昭和九（一九三四）年八月二六日から。柳田国男による「つぐら児の心」に始まり、九月二日の橋浦泰雄執筆分まで全一三回の連載となった。一回あたりの分量、連載期間の長さという点で、読者に訴えかける力としては申し分ない。

第一回目の冒頭には「郷土研究の権威柳田国男氏を中心とする郷土研究家十数氏は、今夏来全国の僻村を巡歴し、選ばれた山村五十ヶ所に残る古来の風習の調査に従事して居るが、その意義深い調査研究の一端がここに紹介される」と、編集サイドからの解説がある。柳田のネーム・ヴァリユーのもとに読者に紹介される「山村調査」。

だが以降の連載を見ると執筆者によって内容はまちまちで、編集サイドが紹介したような「古来の風習」という枠組みから外れているようなものも目につく。たとえば大間知篤三「馬飼ふ村」（八月二七日付）は常陸の村での馬市の印象記、倉田一郎「古神の譜」（八月三一日付）はかつての状態を全く失った山の神や地の神信仰の現状、橋浦泰雄「憧憬の米」（九月二一日付）はそれまでの自給自足の生活から王子製紙の進

出によって米食が一般化した結果、かえって生活が苦しくなった実情を取り上げるといったように、むしろ山村の現況を紹介する内容のものが目につく。いずれをとっても「山村調査」の意義や目的について、特に触れているわけではない。読者はこうした記事に目を通して、「山村調査」の独自性への印象は全く残らないだろう。

調査の意義を積極的に説いたのは、わずかに杉浦健一の「子供の樂園」（九月五日付）程度にすぎない。杉浦は福島県での旧盆一三日から始まる子供たちの盆ガマ行事を取り上げ、さらに同様の行事が岩手県から鹿児島県までボンクド、ボンメシ等の名称であちこちでなされていることに言及する。その上で「民俗学者にとつては興味ある問題で、これによつて忘れられた祖先の生活の一部が解かれるのも遠くはないであらう」と締めくくる。民俗語彙による比較によつて過去の生活の解明を目指す杉浦の一文は、木曜会同人中、最も柳田の方法論を踏まえた記事となった。

こうした内容のものが連載の大勢を占めていれば、「山村調査」の意義を読者に大いに訴えかけることができただろう。だが多くの報告からは、その方法論の独自性への言及をみいだせない。調査地で見たり聞いたりしたことについての紀行文、といった体裁のものが大半だ。『東京朝日新聞』紙上での連載は「山村調査」についてその独自性、画期性をアピールすることに関して、あまりにも無頓着だったと言わざるを得ない。

同様の傾向は『山林』誌上でも目につく。同誌誌上には昭和九年七月号から一二年二月号まで全部で二八篇、木曜会同人の手になる原稿が掲載されている。その数は「山村調査」関連のものでは一番多く、同人の大半が同誌に寄稿しているという意味で重要なものだ。

同誌上には昭和八年度まで毎年一回、「業務報告書」が掲載されていた。参考までに八年度の報告書（昭和九年七月号掲載）から大日本山林会の会員数を取り上げると、総計三八五一名となる。それをそのまま『山林』読者数とみなすことはできないが、少なくとも購読者層の厚さは予想できよう。また会の性格からいって、山村の生活そのものへ関心を寄せる読者も数多くいたに違いない。そうしたことを勘案すると木曜会同人の『山林』への投稿は、「山村調査」でのメディア戦略上の要ともいべき位置にあったといっても過ちではあるまい。

折しも『山林』に木曜会同人が報告を掲載した当時、山村経済更生が大きな課題となっていた。先の昭和八年度の大日本山林会業務報告書では、その事業の一つとして「山村経済更生に関する研究」「山村経済更生計画の指導」を取り上げている。誌面を見てもとりわけ昭和九年には、こうした問題を扱ったものが目につく。目次に目を通すとたとえば「山村及林業の危機を警告し第六十五議会に訴ふ」「我国山村の自力更生策」「山村経済更生座談会」「山村救済上要急なる林政問題」といった具合だ。

こうした状況は、木曜会同人の報告にも反映された。『東京朝日新聞』紙上で調査の方法論に意識的であった杉浦健一でさえ、「山間村落の生活様式」（昭和九年七月号）では調査先について「村中皆んな借金で、土地も人手に渡らうとする有様だと云ふ。世界的不況の現今農山村が借金に苦しんでゐるのは珍しくはないが、これ等の村は常に平地の村より困難な生活にさらされている割合が多い様である」と書き記すほどである。山村経済更生という同時代の課題に、多くの同人が問題意識をシンクロさせていった様子が、ここからは読み取れる。

しかしその姿勢は、一方で「山村調査」の独自性を埋没させかねない

リスクとしても作用していく。昭和九年九月号誌上の最上孝敬「山村経済の協同性」を見ていこう。冒頭で「山村の経済を眺めて我々の感心する一つのものは、その協同性の深く諸方面に行きわたつてゐることである。新しい協同組合、殊に山村更生を標榜して新たな進展の拍車をかけられた諸組合的活動はさておいても、古来育成され来た幾多の協同的経済がなほくずれ乍らも残存して、都会地における個人主義的経済と際立つた対立をなしてゐる」と、最上はいう。そして共有山、共同の経済や手伝い、飲食の慣行に目を向け、現下の不況時に山村が踏みこたえられているのは、幾多の協同的経済の仕組みによるのだと締めくくる。

この同じ号には他に永田龍之助の「山村経済の実態」も併せて掲載。全国山林連合会による山村更生策のための山村経済実態調査に永田は従事しており、その中間報告的な内容の原稿である。さらに中金鎗三「再生途上の山村を訪ねて」を掲載した同誌の「編輯後記」を見ると、この三者を合わせて「現今の山村はいかなる実況であるか、更生計画の実行にいかん努力しつゝあるか又山村古来の協同経済の諸相は如何なる状態であるか、これ等に就て詳述されて居る」とまとめている。最上の一文も含め、全体が「山村更生」という脈絡のもとに編集サイドからは位置付けられていることになろう。ここには「山村調査」の独自性に目を向けようとする姿勢は希薄だ。

『山林』の「編輯後記」は、その後も木曜会同人の原稿について折に触れて紹介しているものの、そこには「山村調査」への言及はまったくと言ってよいほどみられない。編集サイドの認識不足という点もあるのかもしれない。しかしその一因は木曜会同人の付した題名、記述内容にも求めなければならぬ。『山林』の目次を見ると、金城朝永の「山村行―甲州上芦川村素描」、桜田勝徳「日向七つ山雑感」、関敬吾「上の村

と下の村―大分県玖珠郡山浦素描」、倉田一郎「南紀の山村へ」、大藤時彦「下総久賀村雑記」他、特定の調査地についての紀行文風の題名が多目に付くのだ。

こうした題名からは山村がらみのエッセイあるいはモノグラフィックな内容だと見当はついて、全国的な次元での比較を目的とする「山村調査」の成果という性格は読み取れまい。民俗学による調査報告だと明らかな題名は、倉田一郎「青根村経済民俗誌」、佐々木彦一郎「秩父浦山村誌」等にすぎない。また全体を見渡しても「山村調査」を意識した語が、題名あるいは副題に入ったものは、佐々木による先の「秩父浦山村誌」の副題「山村生活調査手帳の順に従つて」一点に限られる。「山村調査」自体について民俗学に縁のない読者層に強く訴えかけようとする姿勢は、木曜会同人の原稿からはほとんど感じ取ることにはできない。題名を通して読者に関心を引き起こそうという戦略性が、どうにも伝わってはこないのだ。

内容についても同様だ。「山村調査」の手法としての独自性は、一つには個々の事象を広く全国単位で比較することを目指す点にある。だが『山林』誌上に寄せた木曜会同人たちの文章に目を通しても、先ほどの題名同様、そうした手法への志向は希薄だ。大半の報告は、調査地一ヶ所についてのモノグラフィックな観点からのものにすぎない。遠く離れた地域での民俗の類似にふれたのは、瀬川清子の「山林の村と海百姓」(昭和十一年四月号)や後述の佐々木彦一郎の報告で目につく程度である。たとえば正月の若水を川から汲む慣行を三河の北設楽郡で聞いた瀬川は、九州の五島での類似した事例を引き合いに出す。そして「海山を遠く隔てた島の海百姓と、山村の村の人が偶然にも同じ軌道を歩んでゐたのかと思ふと非常に懐かしかったのであります」とその一致に目を向

ける。こうした比較を通して読者に注意を促す記述をしているのは、『山林』誌上ではむしろ例外的といつてよい。

「山村調査」の独自性や目的を最も強く意識していたのは、地理学者の佐々木彦一郎である。佐々木が『山林』に寄せたのは先の「秩父浦山村誌」(昭和一〇年二月号)一度限りだが、その副題に「山村生活調査手帳の順に従つて」とあることから、その意図は明確に伝わってくる。ここで佐々木は盆の前にご馳走を作る慣行に目をとめ、昨夏訪れた奄美大島での事例との類似を指摘する。また様々な禁忌を引き合いに出し、それが直接的な文化の交渉や連絡がない場所にも共通することに目を向けた。その上で「我国は文化的には各地が決して孤立した存在ではなく幾層にも各時代の文化の層がうづ高く堆積して居る」と、柳田の見解を敷衍する。全体で一四ページにも及ぶ報告の締めくくりは、「我々の仕事の目的は決して貧窮生活調査ではないのである。それらは量的生活の調査で現に他の機関で詳細にやつて居るのであり、吾々のは村の質の生活調査である」という一節だ。明らかに全国山林連合会の山村経済実態調査を意識した言葉であろう。

佐々木は東京帝国大学で地理学を学び、当時、日本地理学会の常務評議員を務めていた。地理学のアカデミシャンとして確固たるポジションにあつたわけである。だがここでの佐々木は、自らの地理学的な調査法を封印してあえて「山村調査」の流儀に従い、その独自性と可能性を讀者に訴えかけているのである。自らの方法論を確固として持っているが故にこそ、それが可能だったのかもしれない。

佐々木のように「山村調査」での方法論を意識的に『山林』誌上で披瀝した木曜会同人は、例外的といつてよいほど少ない。『方言』誌上で報告のような民俗語彙に重点を置いた記述も、『山林』からは見いだ

せない。『山林』掲載の木曜会同人の文章は、その意味で「山村調査」の意義を、より広い読者層に伝えようとする姿勢に欠けていた。運動論としてみれば、ことメディア戦略に関しては無頓着としか言いようがない。『現代農業』誌上に掲載された木曜会同人の文章に目を通して、事態は同様だ。一方で守随一が「山村調査」の報告書に対して、「趣意書は『民俗学の玄関』にも入らぬ人をも動員し、こちらの陣営に参加させるために簡単に民俗学の何たるかを知らしめる必要があること」と述べていたのは確かだ。だがそうした執筆にあたっての動員への意識は、いくつもの雑誌や新聞への報告に関しては概して希薄で読みとることではきない。

「山村調査」に参加した大間知篤三は戦後、「民俗調査の回顧」でこの調査を批判的に振り返っている。数字によるデータや古文書・古記録類の軽視という問題、さらに調査項目自体がばらばらで、そのため村そのものの性格を明かにするものではなく、たんに個々の事象をとらえようとしていたにすぎず、それを直ちに全国的比較へ持つていこうとするこの問題を大間知は指摘した（大間知 一九六〇 九〇―一二）。

こうした批判は、実は大間知が嚆矢ではない。すでに昭和一四（一九三九）年時点で老岐の山口麻太郎が『民間伝承』誌上で展開しているのである。山口は『山村生活の研究』に対して、「個々の生活事象は村の生活から遊離して取り扱はれ、村の性格は考慮する事なしに資料価値が決定せられ、各個の郷土生活事象は生活の基地を離れて研究所の試験管に並べられて居る様な気がする」という。そして「今少しく村の個性を尊重し、資料を村に即せしめて検討すると言ふ様なことは必要では無いのであらうか」と苦言を呈しているのである（山口 一九三九 八）。

「山村調査」に対する以上のような批判は山口や大間知以降、定着し

た感がある。たしかに最終報告書である『山村生活の研究』だけを取り上げれば、こうした見方となるのもやむを得ない。だが調査の途中経過に目を配れば、必ずしもこうした批判は該当しないことはみてきた通りだ。山口貞夫の報告には常に地理学的立場から資料収集と考察を実践しようとした姿勢がみられると関戸明子は述べ、「山村調査」に対する村の性格、現状、データの軽視という批判は調査担当者によっては該当しないとすが（関戸 一九九四 八〇―二）、この点は改めて強調されなければなるまい。

だが木曜会同人たちのよくいえば多様な、悪くいえばばらばらな問題意識と調査報告はなぜ現在、見えにくくなってしまったのだろうか。ここで論じたいのは民間伝承の会員たちがどのような雑誌メディアと接触をしていたのか、ということである。少なくとも『山林』や『地理学』に目を通す機会をある程度以上の数の会員が持つていれば、山口麻太郎のような批判は出てこなかったはずだ。『民間伝承』誌上の「紹介と批評」欄では、折に触れて『地理学』、『山林』や『現代農業』を取り上げていることは確かである。ではそうした雑誌に民間伝承の会員はどの程度触れていたのか、問題となろう。

ここではその糸口として事例数は限定されるものの、地方の有力会員であった長岡博男と能田多代子の蔵書目録所収の雑誌名を例として取り上げたい。むろん、蔵書目録に収められているものだけが、蔵書のすべてではない。その限界は踏まえなければならぬものの、どのような書物や雑誌を手元に置いて参照していたのかという点が、蔵書内容を通じてある程度までは浮かび上がってくるだろう。

長岡博男は明治四〇（一九〇七）年、石川県生まれ。眼科医の傍ら昭和一二（一九三七）年に金沢民俗談話会を、戦後は加能民俗の会を主催

した人物である。その蔵書は没後、石川県立郷土資料館に寄贈され、『長岡博男文庫蔵書目録』が刊行されている。これに目を通すと、戦前の時点では『民間伝承』はもとより『近畿民俗』『高志路』『設楽』『島根民俗』『ひだびと』といった、各地方の民俗研究団体の機関誌を丹念に購読していたことが伝わってくる。「山村調査」の報告が掲載された『方言』『旅と伝説』も所持している。だがその一方で、『地理学』『山林』『現代農業』はない。

能田多代子の場合はどうか。青森県出身の能田は明治三二（一八九九）年に生まれ、戦前では『五戸の方言』『村の女性』を上梓している。没後、蔵書は青森県立図書館に寄贈された。同図書館の『蔵書目録』能田文庫編』を見ると、能田もやはり『民間伝承』『旅と伝説』『方言』に加え、『高志路』『設楽』『ひだびと』『むさしの』『南越民俗』といった地方で刊行された民俗学関係の雑誌を戦前、広く手元に置いていたことがわかる。しかし長岡同様、『地理学』『山林』『現代農業』は蔵書には含まれていない。

「山村調査」にあたって木曜会同人の間で問題意識や調査手法に大きな隔たりがあったことは、『地理学』や『山林』誌面から如実に伝わってくる。にもかかわらず『民間伝承』誌上では、この問題が取り上げられることはなかった。『地理学』や『山林』の購読者層と民間伝承の会員とは、異なった層だったことを先の二つの蔵書内容は予想させる。また逆に『地理学』や『山林』の購読者層が木曜会同人の文章に触発されて民俗学に関心を抱けば、『民間伝承』誌上に何らかの問題提起があつてしかるべきであろう。だがそうした形跡もない。

ここから浮かび上がってくるのは、何種類もの雑誌や新聞に「山村調査」の成果が報告されたにもかかわらず、民間伝承の会会員の問題意識

を広げる効果が発揮されなかったという事態である。逆にもともと民俗学に関心のない読者を、今度は民間伝承の会に巻き込むだけの求心力に欠けていたことも指摘しておこう。民間伝承の会の会員が目にした「山村調査」の成果は、結局のところごく一部分でしかなかったのだ。しかも柳田の趣旨にそぐわないような報告は、ほとんど会員の目にふれることはなかった。こうした状況ゆえに山口麻太郎や大間知篤三の「山村調査」への批判が、その後定着したのではないか。「山村調査」の成果を多様な活字メディアで取り上げることが、戦略的な運動論のもとでは効果を発揮しよう。その可能性があったことは確かだ。だが読者への効果を意識した活字メディアの活用方針は、掲載された木曜会同人のいくつもの原稿から浮かび上がってはこない。そこに「山村調査」のはらむ限界があつたと言わなければなるまい。

最後に

「山村調査」では民俗語彙を報告のユニットとしていた点で、『民間伝承』誌上で読者に要請されていた調査報告の手法と共通していた。その『採集手帖』は民間伝承の会の一般会員にも頒布され、調査への参加が求められていった。だが読者の反応は鈍かった。結局のところ、『民間伝承』誌上への「山村調査」の報告は、実質的に木曜会同人に限られていた。その活動は同誌誌上でも絶えず紹介されており、一般会員とは別扱いだった。そこから「中央」と「地方」という関係性の構図が次第に明確になっていったことが伝わる。その意味で研究体制の確立という事態が、ここから読み取れるのは確かだ。

当時、各地で民俗学研究の機運が高まり、相次いで関係する団体が設

立され、また雑誌も創刊されていく。たとえば「山村調査」に際して木曜会同人が新潟県の高志路会のもとに立ち寄り交流を深め、さらに柳田が講演に向き会誌『高志路』に原稿を寄せていく。だが「山村調査」を契機として「中央」と「地方」との相互的な関係性が編み上げられていった事例は、高志路会との関係以外はあまり目につかない。関わりをもつにしても、その地域での郷土研究の覇権争いといった脈絡から柳田を受け止める場合もあった。地方への働きかけのための運動論として見た場合、「山村調査」の寄与は限定的だったと言わなければなるまい。

「山村調査」で特徴的なのが、新聞や雑誌といった活字メディアに木曜会同人の調査成果が随時、掲載されていたことだ。柳田国男の幾重にも張り巡らされたネットワークのもとに、『東京朝日新聞』『方言』『地理学』『山林』『現代農業』他、いくつもの活字メディアが発表媒体となっていた。だがそこに寄せられた報告を見ても、ことさら「山村調査」の意義を強調し、方法論の独自性をアピールするようなものはない。たんなる紀行文やエッセイとして受け止められても仕方がないようなものも、少なくない。山口貞夫のように「山村調査」での調査項目とは大きくかけ離れた純然たる地理学の報告を寄せる者さえ、いたのが実情だ。ここから浮かび上がるのは木曜会同人の間での方法論に対する認識の齟齬という事態である。またいくつもの活字メディアを発表媒体として持ちながらも、そこには明確なメディア戦略が欠如していたという事態も見落としてはなるまい。

「山村調査」が終了後、引き続きいわゆる「海村調査」が実施された。昭和一二年度から一四年度にかけて三年にわたり、合計三〇ヶ所が調査対象となった。この調査への参加者は一名。山村調査では二三名だったから、その数は半分以下に減っている。「山村調査」に参加したもの

の、こちらには参加しなかった者の数は一五名。一方、新たに「海村調査」に参加したものは大島正隆、武田明、牧田茂の三名を数えるにとどまった。戦時体制が進展したという事情、あるいは佐々木彦一郎他のように「山村調査」に参加した後死去した者がいるという事情を勘案しても、やはり研究体制として後退した感は否めない。「海村調査」を機に調査に従事するようになった者の数が限られたことは、新たな研究者養成という観点からいえば後ろ向きの結果に終わったということになる。 「山村調査」の実施は、研究体制の確立という点でいえば一過的な事態にとどまったのである。その評価は限定的なものにとどめざるをえない。

(1) 筆者は「山村調査」に関して「山村調査」の学史的再検討を上梓している〔矢野 一九九二〕。そこでの問題関心は柳田の思想上、「山村調査」はどのように位置付けられるかという点にあった。それに對し本稿では柳田の思想それ自体には踏み込まない。あくまでも「山村調査」の運動としての側面に問題関心を置くのが主旨だ。

(2) ただし実際には一冊の『採集手帖』を資料カードとして分解することはなかった。また翌年度の『採集手帖』からは個別の質問ページに設けられていた調査地、調査者名を記入する欄は削除された。『採集手帖』をそのまま残し、実際の比較はそこからの転記によるデータで行うようにしたのである〔福田 一九八四 七〕。

(3) とはいえそこにあるのは中央から地方への一方的な関係ではなかったことに、注意しておきたい。実際のところ、地方での受容のあり

方は必ずしも一枚岩ではなかったのである〔矢野 二〇〇五〕。

(4) ただし『近畿民俗』関係者が、実は「山村調査」に従事していたことは見落としてはならない。調査の最終報告書『山村生活の研究』末尾には年度別に調査地と調査者氏名が掲載されている。初年度昭和九年の場合、兵庫県佐用郡石井村の担当者は河本正義。河本は木曜会同人ではなく、『近畿民俗』関係者である。同誌創刊号末尾には「編輯関係事務」の神戸担当の一人として、その名前がある。この役割は「会規」によれば「神戸、大阪、京都地方に於ける会員選出の代表者を以て之に充つ」とあるので、有力な立場にあったことになろう。実際、『近畿民俗』誌上には河本が執筆したものの掲載は共著も含め、六度にも及ぶ。また「山村調査」の昭和一〇年度の調査地の一つとして挙げられている大阪府泉南郡東信達村・西葛城村も、木曜会同人ではなく、『近畿民俗』に関わりを持つ報告者の手になる調査結果だ。担当者の山口康雄、錦戸建造の二名のうち、山口は短い報告ながら二編、同誌に寄せている。『近畿民俗』関係者が「山村調査」に従事した経緯は判然としない。とはいえそこでの成果は、同誌からは見いだせないのは確かだ。

(5) 改題後もそれ以前の巻号を『ひだびと』は踏襲していたので、その第一号は「第三年第一号」の表示となっている。

(6) 柳田のメディア戦略を見る上で、ラジオ放送との関わりも重要なものとして位置付けられる。本稿では取り扱わないが、この点に関しては石井正己が論じているので参照されたい〔石井 一九九九〕。

(7) この報告書は書簡の日付から『山村生活調査第二回報告書』を指すものと思われる。ただし実際に刊行された報告書を見ると趣意書はなく、また文体に特に注意を払った形跡は見当たらない。このあたりの経緯はどう判断すべきか、現在のところ考えあぐねている。

(8) 同じ題名で複数回、連載のものは一つとカウントした。

(9) 「山村調査」の調査方法とは異なった手法をとっていた同人が戦時中に死亡、あるいは同人を離れるといった事態も、「山村調査」がはらんでいた多様性あるいは一貫性の無さを見失わせる一因となったことを挙げておきたい。アカデミシャンとしてのポジションを固めていた地理学者の佐々木彦一郎は昭和一一（一九三六）年に、明治大学講師であった地理学者・山口貞夫も三〇代半ばにして昭和一七（一九四二）年に逝去。杉浦健一は昭和一一年には木曜会同人を離れ、機能主義的立場に立つようになる。その杉浦は昭和二九（一九五四）年に五〇歳で亡くなった〔泉 一九五四 二六六〕。

最後になったが鶴見太郎氏が橋浦泰雄関係文書の整理を行い、鳥取県立図書館が保管するまでの道を付けたことに大きな感謝をささげたい。また鳥取県立図書館郷土資料課の渡邊仁美氏には、橋浦あての書簡の閲覧にあたって多大な便宜を図っていただいた。これまた深甚の謝意を表する次第である。

青森県立図書館 一九七一 『蔵書目録 能田文庫篇』 青森県立図書館
荒井庸一 一九八八 「木曜会」 柳田国男研究会編『柳田国男伝』三二
書房

石井正己 一九九九 「柳田国男の放送」『東京学芸大学紀要 第2部門

- 人文科学』50、東京学芸大学
- 石川県立郷土資料館 一九七五 『長岡博男文庫蔵書目録』石川県立郷土資料館
- 泉靖一 一九五四 「故杉浦健一教授と人類学・民族学」『民族学研究』18(3)
- 岩崎真幸 一九八六 「山村生活調査」とその背景」『東北学院大学論集—歴史学・地理学』第16号、東北学院大学文経法学会
- 大島正隆 一九八七 『東北中世史の旅立ち』そしえて
- 大藤時彦他 一九九〇 「座談会 五〇年前の山村調査」成城大学民俗学研究所編『昭和期山村の民俗変化』名著出版
- 大間知篤三 一九三五 「民間伝承論」から「民間伝承」まで『民間伝承』第二号、民間伝承の会
- 大間知篤三 一九六〇 「民俗調査の回顧」『日本民俗学大系13』平凡社
- 大間知篤三他 一九五八 『日本民俗学大系11 地方別調査研究』平凡社
- 重信幸彦 二〇〇九 「野」の学のかたち—昭和初期・小倉郷土会の実践から」小池淳一編『〈歴博フォーラム〉民俗学的想像力』せりか書房
- 杉浦健一 一九三五 「人文地理に於ける民俗の役割(一)—福島県大沼郡中ノ川村の社会形態学的研究」『地理学』第三巻第四号、古今書院
- 関敬吾 一九八一 「柳田民俗学をいかに学ぶか」『関敬吾著作集8 民俗学の方法』同朋出版
- 関戸明子 一九九四 「山村研究の成立過程における動向—山村生活調査(一九三四・三六)と地理学研究」『西垣晴次先生退官記念 宗教史・地方史論纂』刀水書房
- 田中宣一 一九八五 「山村調査」の意義」『成城文芸』第一〇九号
- 鶴見太郎 一九九八 「柳田国男とその弟子たち 民俗学を学ぶマルクス主義者」人文書院
- 鶴見太郎 二〇〇〇 『橋浦泰雄伝—柳田学の大いなる伴走者』晶文社
- 福田アジオ 一九八四 「解説—「山村調査」と「海村調査」」比嘉春潮・柳田国男他編『山村海村民俗の研究』名著出版
- 福田アジオ 一九九〇 「日本の民俗学とマルクス主義」『国立歴史民俗博物館研究報告』第27集、国立歴史民俗博物館
- 福田アジオ 二〇〇九 『日本の民俗学 「野」の学問の二〇〇年』吉川弘文館
- 宮本常一 一九三五 「採集者の養成」『民間伝承』第四号、民間伝承の会
- 最上孝敬 一九七五 「木曜会創設当時の大間知篤三」『大間知篤三著作集第一巻 月報1』未来社
- 柳田国男 一九三六 「採集手帳のこと」『民間伝承』第九号、民間伝承の会
- 矢野敬一 一九九二 「山村調査」の学史的再検討」『日本民俗学』第一九一号、日本民俗学会
- 矢野敬一 二〇〇五 「昭和初期における柳田国男の方法論とその受容—新潟県での郷土誌・史の記述を事例として—」『静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇)』第55号
- 矢野敬一 二〇〇九 「柳田国男と読者のネットワーク編成—昭和初期・長野県での『真澄遊覧記』『一茶叢書』の刊行戦略」『静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇)』第59号

- 矢野敬一 二〇一〇 「柳田国男と雑誌『民間伝承』の戦略—昭和初期・民俗語彙と運動論」『静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇）』第60号
- 山口麻太郎 一九三九 「民俗資料と村の性格」『民間伝承』第四卷第九号、民間伝承の会
- 山口貞夫 一九三六 a 「山村聚落の生態（一）—山形県最上郡安楽城村」『地理学』第四卷第四号、古今書院
- 山口貞夫 一九三六 b 「山村聚落の生態（二）—山形県最上郡安楽城村」『地理学』第四卷第六号、古今書院